

(266)

日 本 学 術 会 議 だ よ り

○日本学術会議の概要と活動体制：第22期（～平成26年9月）まで

昭和24年1月、内閣総理大臣の所轄の下、政府から独立して職務を行う「特別の機関」として設立された日本学術会議（現在は内閣府所轄）は、84万人の科学者（人文学研究者を含む）を内外に代表して、210人の会員と約2000人の連携会員によって、I. 政府に対する政策提言、II. 国際学術交流的な活動、III. 科学者間（研究者間）ネットワークの構築、IV. 科学の役割についての世論啓発などを行っている。第20期（平成17年10月～）には新体制がスタートし、7部構成から3部構成（人文社会系は第一部）となり、学協会との連携が緊密だった各種の研究連絡委員会からボトムアップで組み立てられてきた従来の運営方式に対して、緊急な事態にも対処できるような、幹事会主導の迅速かつ、トップダウン的な運営方針が導入された。『日本の展望——学術からの提言2010』及びそれに付随する各種の提言、ならびに、東日本大震災以降の復旧・復興支援問題、あるいは原子力利用のあり方、放射性廃棄物の問題、さらには未来の地球社会における科学・技術の役割と諸問題などについての数多くの提言が、新体制確立以降で特に注目すべき活動成果である。

○第23期（平成26年10月～29年9月）の新体制、および日本印度学仏教学会との関わり

第一部71名、第二部（医学・生命科学）70名、第三部（理学・工学系）69名の会員（計210名）、および1,883名の連携会員からなる。会長には第22期に続き大西隆氏（第三部土木工学・建築学）が選出され、ついで副会長に井野瀬久美恵氏（第一部史学）、向井千秋氏（第二部総合工学、臨床医学）、花木啓祐氏（第三部環境学、土木工学・建築学）が会長指名された。第一部役員には小森田秋夫部長（法学、地域研究）、杉田敦副部長（政治学）、小松久男幹事（地域研究、史学）、恒吉僚子幹事（心理学・教育学）が決まった。

本学会が最も関係する第一部哲学委員会の役員構成は、戸田山和久委員長（西洋哲学、情報学）、岡田真美子副委員長（インド哲学、環境学）、藤原聖子幹事（宗教学）となった。第20-22期（各期3年）に会員を務めた丸井浩に代わり、第23期からは岡田真美子会員が中心となり、あわせて本学会を母体とする7名の連携会員が、以下の各種の分科会に所属して活動を行っている。

哲学委員会のもとには、①〈古典精神と未来社会分科会〉（吉水千鶴子新幹事、丸井浩理事長、岡田真美子会員、下田正弘氏）、②〈いのちと心を考える分科会〉（木村清孝元理事長）、③〈哲学・倫理・宗教教育分科会〉（斎藤明前理事長、藤井教公氏）、④〈芸術と文化環境分科会〉、⑤〈哲学分野の参照基準検討分科会〉（斎藤前理事長）があり、〈言語・文学委員会〉〈哲学委員会〉〈史学委員会〉〈地域研究委員会〉の合同分科会としては〈アジア研究・対アジア関係に関する分科会〉（斎藤前理事長、徳永宗雄氏）がある。

○公開シンポジウム

- ①「環日本海の文化交流——出会い・交錯・摩擦・融合」（第一部・金沢大学共同主催、金沢大学国際文化資源学研究センター共催；企画担当丸井、平成26年8月3日（日）13:00～17:00、石川県政記念しいのき迎賓館）報告：小島毅「東アジアの海域交流と北陸の文化」、上田望「文化資源としての伝統芸能の可能性：日中両国の調査・保護活動の取組みから考える」、四方田犬彦「東アジア 伝統演劇とメロドラマ映画の諸相」。約120名参加。
- ②「グローバル人文学の可能性と課題」（哲学委員会・日本哲学系諸学会連合・日本宗教研究諸学会連合の共同主催：平成26年12月6日（土）13:30～17:00、日本学術会議講堂）司会：野家啓一、開会挨拶：岡田真美子、報告者：西村清和、後藤和子、チャールズ・ミュラー、林永強、コメンテーター：下田正弘・上原麻有子、閉会挨拶：藤原聖子

※日本学術会議の組織・活動等の詳細は「日本学術会議ホームページ」(<http://www.scj.go.jp/>) 参照。